郷土摂津 いにしえ通信

第４６号　平成１４年２月１日

発行　摂津市教育委員会　生涯学習部生涯学習課

〒５６６－８５５５　摂津市三島一丁目１－１

℡（０６）６３８３－１１１１　℡（０７２６）３８－０００７

ホームページアドレス　http://www.city.settsu.osaka.jp/

2月 節分

第11回 わがまち ちょっと昔の生活

節　分　立春の前日にあたる２月３日をいいます。この日は、大寒の末日で冬から春に改まる日を意味しています。古代では立春が年替りの日でしたので、節分の夜を大年とか歳の夜と呼び、年末の物忌（ものいみ）行事（心身を清めて家にこもる事）である年籠りをしたり、神仏だけの正月として祭ったりする地方もあります。

福は内、鬼は外　一般にはこの日に節分祭、追儺（ついな）式などを行う風習が多くおこなわれています。古代中国の、各季節の終わりに儺（な）といって、悪気邪気を追い払うという行事が輸入され、室町時代以降普及したものです。柊（ひいらぎ）の枝やいわしの頭などを、魔除けとして門口や窓にさし、「福は内、鬼は外」の声掛とともに豆をまいて鬼を追い払う行事となりました。豆に身の災いを託す意識があったようです。この豆を福豆とよび、除けに年齢の数よりも一つ余計に食べる習慣も生まれました。

節分は現在家庭だけでなく、多くの神社・寺院での催しとなり、年男による豆まきや、鬼を追い払う追儺の行事として行われています。

福は内、鬼は外というのも、すでに室町時代の禅僧の日記（臥雲日件録抜尤）に見られます。鬼は全国各地に連綿と伝わる寺や民間の年中行事に根ざしています。そこで登場する鬼の役目は人の世界から追われて去る鬼、霊的な力を発揮して悪霊を打ち払う鬼など、それぞれに付与された役を演じています。また容姿も多彩なものがあります。

摂津市域の聞き取り調査から

○　柊が手に入らないので、割り箸にいわしをはさみ戸にさしたりしました。（野々）

○　若い娘さんがオバケ（大きな桃割れ髪を特徴とする和装）を結ったりしました。（中内）

○　豆を食べず、はったいこを湯にいれて、砂糖とかきまぜて食べました（別府）

講座や展示のご案内、活動報告など多彩な文化財情報を毎月お知らせします。
また、このページでは皆様の投稿を募集しています。

摂津市文化財講座が開催されます。

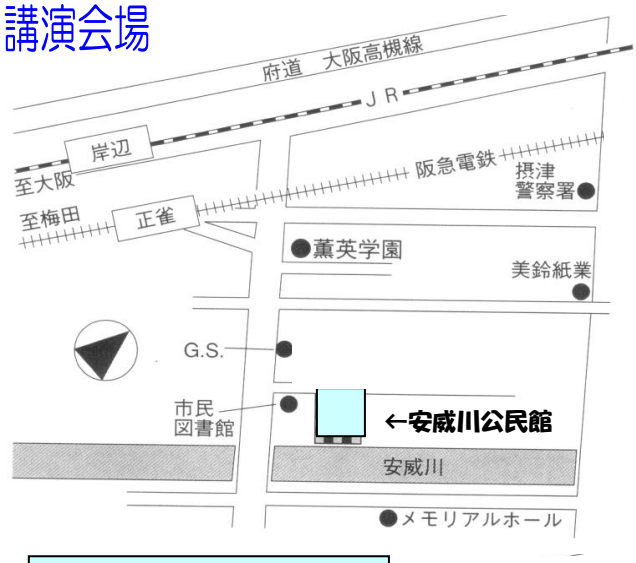
『魏志倭人伝を読み解く』

平成９年度から摂津市は本格的に発掘調査を実施しています。古代史をおもしろく学び、摂津市の埋蔵文化財に関心をもっていただける内容です。

と き　平成 14 年３月４日（月）
午後１時 30 分～３時 30 分
ところ　摂津市立安威川公民館（大ホール）
講 師　歴史・哲学研究所　藤田　友治氏
定 員　180 名
申込み　当日直接会場へ。参加費無料
問合せ　摂津市教育委員会　生涯学習課
生涯学習推進係（内線 3213）
TEL（06）6383―1111（0726）38－0007

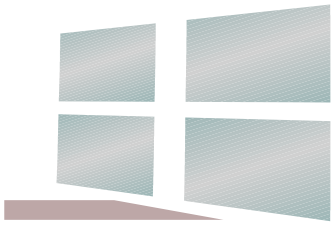
和泉市観音寺遺跡出土の石鏃。魏志倭人伝の時代（弥生時代後期）は戦乱の時代でした。石鏃も武器として使用されました。

講演会場



摂津市正雀4－9－28
TEL(06)6383－6690

「魏志倭人伝」
魏の歴史を記録した「魏志」のなかで当時の日本の様子を記録したのが「倭人伝」です。邪馬台国の女王卑弥呼が、30 余りの小国を従えていた記録など当時の弥生時代を知る貴重な史料となっています。



郷土史コーナー

意外と身近な郷土の歴史を紹介していきます。

味生（あじふ）の歴史

明治の中等教育

明治 20 年（1887）３月、茨木村東本願寺別院内で私塾「三徳学校」が設立されました。摂津市域では、のちに独立して清泰書院を起こした、味生村大字一津屋の野口宗顕氏が明治 20 年９月から明治 21 年８月まで、ここで英語学を学んでいます。三徳学校は第四尋常中学校が明治 28 年に設立されるまでの間、中等程度の知識と教養を授けた学校として重要な役割を果たしました。

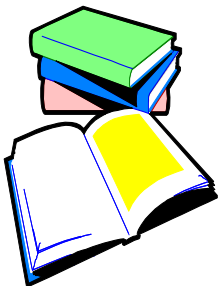
当時、市域で唯一の私塾である「清泰書院」は、明治 25 年３月、味生村大字一津屋の誓源寺において設立・開校しました。設立者の野口宗顕氏が、大阪府西成郡新庄村大字下新庄にあった新庄善亮氏の経営する漢学私塾「修文学館」の分校として設立したもので、正式には「私立修文館分校清泰書院」といいました。

設置の目的は「学齢外にして、府県立諸学校へ入学し能はざる者の為め諸般の便宜を計り、漢学を以て修身科・読書科・作文科の三科を専ら教授する」ものでした（明治 25 年２月「私立学校設置御願」誓源寺文書）。職員は校長（新庄善亮氏・月給３円）、教員１名（月給６円）、都講（校長補佐）１名（野口宗顕氏・月給なし）、舎長（月給なし）でした。

規則書によると、入学資格は満 15 歳以上、高等小学校卒業もしくは同等以上の学力を有する者とし、生徒定員男子 30 人で、入学に際しては入学試験は実施されませんでした。修身・読書・作文の三科を正科とし、１年から３年まであり、各学年を前期後期にわけていました。ほかに１科あるいは２科を修める別科も設置されていました。束修料（入学金）は 30 銭で、授業料は１か月 30 銭、寄宿舎費５銭、寄宿食費当分２円、通学生雑費５銭となっていました。

生徒心得によって、事故のない限り必ず出席することを義務づけ、心得に違反する者は、その過罪の軽重により放課後、漢字 100 字以上１万字以下の謄写などをさせました。試験は臨時試験と卒業試験があり、臨時試験は期日を定めず、卒業試験は卒業期に実施し、毎科目の試験点数に臨時試験の各科目点数を加算して百点満点として及第者には卒業証書を授与しました。

明治25年から36年までの門生表から生徒数の推移を見ますと、１期生では大字一津屋４人、大字新在家２人、鳥飼村７人、２期生では大字一津屋７人、大字別府２人、大字新在家１人、味舌村３人、吹田村１人、中島村大字江口１人、３期生では、大字一津屋９人、鳥飼村１人で、延人員 38 人のうち、地元の味生村の出身者が 25 人を占めていました。



「摂津市史」より　　担当　（茗荷）

第１１回　埋もれた摂津市の歴史

発掘調査で明らかになっていく摂津市の埋もれた歴史をシリーズで紹介していきます。

平成１２年度 蜂前寺跡２次調査

土壙墓1出土・土師器皿

◎土壙墓１から見つかった土師器皿です。口径は約8.9cmです。口縁部（皿の上の端部）を２段にナデています。また「面取り」という12世紀頃に特徴的な作りかたをしています。

土壙墓（どこうぼ）について　今回の発掘調査では、土壙墓が確認されました。墓制の研究（とくに庶民の墓）では、弥生時代の墓ではいくつかのタイプが形成されているのが分かってきています。古墳時代なりますと大きな前方後円墳がでてくると逆に庶民の人達の埋葬が分かりにくい状況になります。中世についても、現在、地域色、階層性、墓地の形成と集落の関係などを軸に研究者の間で様々な議論が行われています。通常、中世の土壙墓には、副葬品はそれほど目立ちません。しかし関西のほうでは、土壙墓に土師皿だけとか身分が高いと男性なら太刀、女性なら鋏と鏡などがセットで副葬されたようです。

また、構造も箱式木棺という簡単な木の棺も見られます。

土壙墓1　Ｉ区南西隅より見つかりました。西壁にくいこむかたちで全体の形は確認できませんでしたが、現存する範囲では南北長250cm、東西長170cm、最深部は25cmです。埋土は灰オリーブ粘質土でした。土壙の南辺には完形の土師皿１枚をうつぶせに置いていました。また土壙内に木片が腐敗していく過程で残存した炭化木片が確認されました。木片の残存は決して良くはありませんでしたが、輪郭をたどると箱式の木棺が想定されます。

↑土壙墓1・2検出状況写真
（右が土壙1・左が土壙2）

土壙墓2　Ｉ区南西隅に土壙墓１に切られる形で土壙墓２が見つかりました。この土壙墓２は土壙墓１を掘削する時に削られながらも下肩は残り全体の大きさが復元可能です。南北長約180cm、東西長約200cm、最深部は35cm　です。埋土のベースは灰オリーブ色の粘質土ですが、地山の黄色粘土ブロックが混じり一気に埋められたような堆積でした。この土坑からは瓦器（がき）の碗をうつぶせにして置いた状況が確認されました。また、土壙の底から炭化し、かなり土壌化が進んだ灰色の粘土ブロックが確認されました。　　担当　（伊部）